

グレゴリオの家だより 資料室より 1994年

かねてよりオワゾリールから出版が予定されていた E.H.Roesner 監修の "Magnus Liber Organi" (オルガヌム大全) の第一巻 "The Parisian Quadrupla and Tripla" を購入しました。非常に見やすいモダン・エディションと校訂報告からなるもので、研究的意図が強い叢書ではありますが、演奏に供することも可能です。聖グレゴリオの家が典礼の実践の場であるとともに宗教音楽研究所でもあるならば、このような歴史的モニュメントを一冊そなえておいてもよいのではないかと考えます。

西洋音楽が多声性を組織的に展開させるという独自の段階に踏み出した 11 世紀より、ウィンチェスター・トロース集、サン・マルシャル・トロース集、カリクティヌス写本など、オルガヌム楽曲を含む写本がヨーロッパ各地に散見されますが、12 世紀のパリ、特にノートル・ダム楽派はレオニヌス(活躍年 c1163-90)、ペロティヌス(活躍年 c1200) という二人の偉大な音楽家によって、さらに高度で豊かなレパートリーを後世に残しました。

Magnus Liber Organi というのは、レオニヌスとその後継者ペロティヌスが教会暦にしたがってすべての祝日のための聖務日課とミサのためのレスポンソリウムを多声楽曲に作曲し、組織的に整えることを意図したもので、典礼音楽史において非常に重要な位置を占めています。この編集主幹のレースナーはこれを近代的な意味における「音楽作品」の最初のもの、と述べています。

さてこの第一巻は Magnus Liber を伝える写本の中でも比較的新しい Wolfenbüttel, Herzog August Bibliothek, 1206(olim Helmstad 1099) と Firenze Biblioteca Medicea Laurenziana, Pluteus 29 Codex 1 からの楽曲が多く、3 声、4 声のオルガヌム、ディスカント様式によるクラウズラが中心に所収されています。その他は Montepellier H 196, Bamberg lit. 115 などからのトリプラとクラウズラ、および定旋律となっているグレゴリオ聖歌が収められています。

当資料室でオルガヌム関係の他の譜例を見たい場合はアメリカの中世音楽研究所が出している "Notre-Dame and Related Conductus" があります。また同研究所は、上記の Wolfenbüttel の写本研究として "The Latin compositions in fascicules VII and VIII of the Notre-Dame, Manuscript Wolfenbüttel Helmstadt 1099" (Musicological studies, vol. XXIV) を出版しています。1 巻が校訂報告、テキストの翻訳、歴史的概括、2 巻が楽譜 (モダン・エディション) です。残念ながら当資料室は所蔵しておりませんが合わせてご紹介します。

杉本ゆり 記